



石門

心學道札話

三篇

中

9
3895
8



門 9
號 3895
卷 8

心葉道之

話三編卷之中

武國小殿

津寶藏と頼る彼人が三人ありて一人は
三人の一人、近眼の二人も常任眼鏡をかけ通し

わのし取外しを人眼のより見える馬鹿も男がみえ
ず小吉お好れ子細らしく男おとどぞ自身もそ役

なりふを思ひ居るお武時その役と命令され
て大に転び事不実務方此役所へ出てこれ先役

三人おがら眼鏡をうけて並んで居るおとどぞへ出て私
も今日より清同役作せ付くまあるがふぞんへお志

ういふも不綱法お私お万端よあしく清引也

心葉道之

三編

早稲田 大學 図書館
第27.6.16 号
藏 書

かの男ハ只へいしくハイしくかゝあまうましたへいしくハイしく
 で成儀ハ特見ハ一とあり。きんご也。夫りく名義書書
 一書ハ定家ハ小倉色紙ハ統理ハ此後。千鳥
 の鳥籠蜀江の錦もどく出でて見せる変ハ此男ハ此
 たり只へいしくハイしくかゝありましたへいしくハイしくで
 仕まよと扱その後で二人がひまぬいふ何ちあつどの
 殺ハ此御宝物と特見とされ。さぞ膝うつがささどいど
 ろかこやえべかの男ハ中よへ。さうさうさう膝のうづさる
 とやまゆとよく人がやまぬらねい。今まて一友もつがれ
 とゆらるる也。その意味合と知りませなんど。今皆換

の言言禁でたりのい合。て見もすればあまが儀との儀の儀
 きののでまじらふ何と特見とす。とも只へいしくううく
 信とむり何がどあうさ。門むりも女かつのりもせあん
 だといさけなげ何と所房も吐く。やなら入るる。暇と
 うけと也。大切もゆとううく仕舞もやあう。ありや
 志もまの。曲彦のたを。飛もあや。あまさん。方も又
 勢も私も中も。此男ハ中も。あま。と。飛ぬ。と。一寸
 牙もまう。つて。さ。や。め。ぬ。も。や。ま。天。山。も。地。中。も。欠
 留けな。大。切。も。親。清。り。止。山。ら。し。ふ。刀。て。ハ。飛。ぬ。大。恩。の
 あも。此。主。換。が。友。情。事。の。や。う。ま。い。月。と。ぬ。り。見。守。が。依。人。の

中よりなみの長ねり夫婦が故同士のやう小思つてせよせ
 ぬらあむぐらるる平の御代よまきて廣い世界小任で長
 ちがら昔の古ゆれ悪世界よのち終りう曉中て新と志
 うめて頼頼もつらと長もせぬると能身小まうつてまが
 よ自能そのやう小どもなむと長もせぬると能身小まうつてまが
 といふれ知の眼鏡とらげて長目のよやうら大切か世界と
 うらうくは長よせぬとぬ勿新なるゆいぬとらぬと誰か
 も中んれ眼と固いてねまがら、のよ小の眼鏡と外して涉
 はずおさるがよのそめよ人乃まらあいよでぶぶらうまら
 由一そとでまふにと為しこはよ由を人よ由半哉と傳を

らまの神道でも仏道でも極まらぬ眼をゆいぬと長一彼
 といふて長らるる三つちがふてあはけきと彼にたつこつ
 それとたどて法話やせぬ此扇と交へ出しておきと指でお
 しる時よ指ととふ向るぞといやまが扇の西うらね
 ゆまば指と東の方向でおの扇くと指のなむびやこ
 扇の東うらねゆまば指の西の方向でお此扇と指の
 なぬ又ゆらうらねゆまば指の南の方向南うらまぬゆま
 指の西の方向ゆらうらねゆまば指の南の方向南うらまぬゆま
 上へ向る指の向中へは方上下とたきふ遠くで長をけ
 きと指の扇はゆまも遠くまな中へまよのゆたつこつ

のを我の大道（引）とて一にむつくり南をわきと佛と
 不接もあまの南を妙法蓮華經といふ接もあり接は
 たまは清めたまといふ接もあまの子回といふ接もあるの
 どやゆどの接（由）もゆりゆりそれくの教へのとあり
 ま一文字は仍つめてを我の大道といふ中んは解へ
 直のなりますればそれでよのどやまよその折（折）あ
 目ざしたあまの除（のけ）てたいて指（さ）をのりとはるうう噴（く）吐（き）が
 おくる神道（しんどう）のよの佛（ぶつ）屋（や）がまのイヤ南をわきと仏（ぶつ）あり
 がつ乃南を妙法蓮華經が功德（くどく）が勝（か）るのと然（しか）るゆへも
 まぬゆいそで肝（かん）要（よう）いそが我（わが）の事（こと）ゆとのゆゆらどや

ても合（あ）はらぬ親（おや）儀（ぎ）ちとのゆを上げまはれたら半
 てもいひ中（ちゆう）り遠（とほ）ふとたまふ遠（とほ）やとるゆゆら不（ふ）思（し）ふ日（ひ）が
 親（おや）乃（の）中（ちゆう）でも甥（せう）の祖（そ）父（ふ）とゆゆら姉（あね）の男（おとこ）法（ほう）といふ
 たりすとどろ布（ぬ）す解（と）のゆゆら中（ちゆう）のゆゆら女（め）房（ぼう）を
 ちのゆゆそれゆつて家（いへ）はたうゆゆら昔（むかし）或（ある）ゆゆ
 毎（まい）所（ところ）といふ所（ところ）房（ぼう）が男（おとこ）がわい（わい）て女（め）がゆゆら慈（あはれ）政（せい）でゆ
 つつけゆゆら身（み）の慈（あはれ）政（せい）を知（し）るゆゆらわい（わい）あるゆゆら外（と）と通（とほ）る
 と子（こ）位（い）が勢（せい）力（りき）をアしくらんをが通（とほ）るゆゆらとゆゆら
 て家（いへ）家（いへ）西（にし）の女（め）房（ぼう）はむらゆゆらゆゆらと子（こ）位（い）が慈（あはれ）政（せい）といふ
 が正（ただ）まゆらんをり見て是（こゝろ）まといひ女（め）房（ぼう）もゆゆらわい（わい）

さ申うともいひりひていや慈護といふほどふもぢきとぬが
 実乃おの左乃是が少し短いのではあることた毎所はそ
 ぎ遠や中世やうふおきて十後子供がちんたといふと
 毎所をたふ小服とたておまが是はちんた下やむのぞ只
 左の是乃うのい乃下やとた子供をますしく愛とた
 てて平慈護とやくと笑ふ也毎所も少しうさうひれ
 らのたつて流の二物一圓といれと子供がちんたといふ
 がさうやとらうのいふものにて下とれといふ二物もさ
 ざらうともいひりひていや實のおの左乃是が少しぢ
 のよとつてけふ。そとで毎所は内へつて女房は白い

ねまが是は實も右乃是ののよやげふ。それまたうさうさ
 おどつてよくねまを欺ねつと馬くこもま高生めとたさ
 小服とさるゆへ女房もあされてハテまおを中うよ服
 とさばと終ものど果してはふおされ女房はつて下はは
 おすよはゆとつてさのうんけを業と必あてふ。さ一申すは
 いを毎所は又いりさぬそれい。さふてもあちやと女房の業
 は又はよふて権那寺の和尚へ性を此路つてくじと。ちん
 たといふ人もあつていづこさういふ人もあり又左の是の。そと
 のトやとつていふものもあさつたは是の長いのやといふ人もあ
 つてたさ不迷惑いへましたらう。さうや金種とらうらう。

であらうまはる信實乃正と定めて下されといふ和尙も
 此初目ハ圓扇也。おけらるイヤ毎所どの此論ハ勝負也
 ではざるといふをへ正なるなるもの中よりまののであら
 ます守らるる和尙も冷うさなくイヤなるをもあさぬ
 が信實の正と申す。毎夏の掛ぬのであらるといふだけ
 おゆと海房おともあるものゆる人の辯と標と世を
 申す秋是城投出とてさうらうとわいよ。さよすとちん
 むといふも實は此中じつとつちも。かむなら此中右の是乃
 長のとつちも左の是れ短いとつちも。あまの掛ぬといふも
 らお此中であらうといふら知ると文字や書物や経

文をうると標して我本ハ此知ぬのハ。かむなら此中右
 仲間ハ也。詮反もさうか海房おともあ止あす。後
 流ハ流生をぬのかんとおかしてはらう。さうよ。さあする
 と此克己の流辯の廣大お意味がさつさうと目よりい
 去実ハあらうか。さあなる。さあなる。此流辯を何ほどあ
 法を教。中ても是袋外らう。是乃ううと扱中うで今一
 ささる。さあするぬ。大切おらう。さうらう。仕舞せう。や
 ならぬ。己ハ先年ある人けらる。さあする。孔子換おもた
 ついさる。あるに。何ほど。廣大。いひ。さあ。たつ。さ
 一日己ハ克て礼。後つ。とて天下中。さあ。に。健。帰。後

居るもやのちうかた己といふ眼鏡乃西為で大切か世界
 と只うちしくはまひじや怨中もかくふも本心知て此己
 といふものをお殺す修めは子びなりやね仁と為少中
 己小中もじやを殺一切と西が即仁の本体じやまじ
 此所ちあ中も修めやとやう言へんやい西で中場居
 まりや孔子さや教回の徳らおけりて中と初来ぬ
 るゆへをいふ今でん引さげて強きどもを強きとく
 実言かうふ中と六万中と堪忍さるゆへとやとねりて
 それでよる百戦百勝一忠よ石如の忠の徳るるも持戒
 苦行も及ぶべくるべたごつて堪忍の徳よどんあまの

でも款射中へおぬぬといふである。志の〜又此中うは徳
 くといふとおまうごうは良服れまのよ。あ〜るるゆへとやとを
 う。ねりておまうごうも知まぬら堪忍といふゆへの中く
 ちや〜るるゆへおまうごうもせぬ己小佛法でい世男と要
 世男といふまが。その要義といふゆへ天竺のおとばで。そ
 る漢土の文字小難解と堪忍といふ三字又なるもあぬ
 堪忍は二字と世日本のあまを刑とたへりのぶと刑で
 せうとくいつたあ〜るといふるなる。さふらると堪忍世界
 といふも堪忍世界といふるもゆへ事でもあ〜るるゆへ世
 男といふるゆへ。それゆへを意味と世決は孔子さぬが

顏回へは移んどらるるは志ありと云ふれどもその序は
たふしやまをらぶが通すと清居ゆまがまをく
ぐりませ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

後席

顏淵曰請問其目子曰非禮勿視非禮勿
聽非禮勿言非禮勿動顏淵曰回雖不敏
請事斯語矣

扱此顏淵が精を同じ同人といはれりといふは席にも
座くはちかしくやとあり孔子換が輕圓へんの中も私
らとちんとの差別のありや私んといふ身終の己
は克でんといふ天理の修なりとると仁といふぞと
は志ありとされといふ輕圓を志と味と速と法を修らる
とて母といふと清居心はありあるその己小克ら此條目

げふ何ともわお入てあぐら法下也。あざりませぬ
うまう正高乃已も克て礼も復ると孔子は傳せしむ
ふておざりませぬ又後くおとこ小介也

と申すのむ垣ひきた月す甄の那

と申すで忍と仇で報すといふ事。おんおてありけ
仇と忍で久すと云ふ。いづれや申す。ちがやう
男も女も白よ

手おるも袖もあはるや梅乃花

あはるはとの仇と忍で報すのんで寛仁大度といふ
ものも己も克て礼も復ると正下には申す。此法お

い何ふものでも抗拒といひ出来ませぬやも。おんおて
多のりあがら

神君乃も法にたつて一ツで天下統一統事もあるとの

法に徳も復しませ。昔小條の東流りう二百七十八年

息留れあうて切つ法も具徳を報や。周を申す。妙を来

乃法代と法まり己も今日の者。ぐくや。おんおてその法

に法と忍もといふ事。おんおて。ふとも勿辨か。やも。おんお

小まのいふ。これまをね。廣大を法。忍で法。おんおて。か。おんお

と。おんおて。おんおて。おんおて。おんおて。おんおて。おんお

の仕業して居る。おんおて。おんおて。おんおて。おんおて。おんお

といふものなり又盲地を懼ずと申す也。ねをりしふり七知を
 ぬのりてこがね取や身猪の小猪すといふこともせず。まま
 んよ勝たるせらるる負まゝのたとひつり骨を折て居る何と
 はまゝぬもの下やぶざりませぬらも高先生のつらは奇
 小も一肩するまゝとてつりやうげあう。かなむ欲中より小猪ぬ
 ままが肩さすしは負好から好の猪さすといふもその下
 とならとも肩するまゝのほろろいなる。まゝあつく持出して家
 小猪中よりおなまゝりませ
 負てつり智恵は力乃勝さよといふれもかんしんをそぞ持信
 まんが持えすれは世界中を欲むなん。それとをそとて法

行中とまゝおれりつり結りある背あるおよ判生あつたか
 従者様がひやく支を要人毎釈く肩が多勢つれば是
 まのり親音孫とつりますけおれといふてつりつりつり
 多夫慈大悲は親世音菩薩千は佛は此馬夫と持く怨
 欲返教おさめりぬる南無大慈大悲は親世音菩薩と云
 多小つりつり様と様の下りつり暮るつりつり。そつりつりく送てお
 て前へ向ていひまゝはほろろとて。そとて来て親音孫へ
 とつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 中つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 で目おつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

半らぬつてきて下され我わが代は後世へそなへとも悪く
 知らぬと申すはきりその大まなれど亭主が代は猶も
 ひで猶と書くはけなふ内也我わが代はこれおそれもなく
 多しと申すは孫もりおけて磨切記ある申す小孫を孫
 月々年々不替骨一は家と猶之居し終へ世さうくと
 不奇と知やう條と捨るを種業はる。さぬぐのまの
 一と書くとるおつて家此頃且ぬが何と申すわら
 おつと猶と知やうたがを猶が氣と捕るたうとて我は
 親とこれ子とては娘と産れ女房とあらこれいやを
 た後おつておぼるきとせきと捨たれとて家も又同ド

申す中絶一の氣絶とせよはなれんさうとてあの猶と退
 治し申すといふはあつた力申すとも命あるゆゑや
 妙くは神佛の力を借りのは申すはなれと氣一統中命絶
 音操一おもとんとび猶返教とつるのどやといひまゝこれ
 養はあまを突おがら思絶言お教とてあつそんあま
 嵐よのおまへうこのあれうで申すもたの。おそわりの気絶
 となるもののみその猶とやと思つるうと聞かされは嵐ハ
 る家にとそつてやもく柿やおとろや度い世界は我
 くら身とてす歌となるもの猶よりあまはあざぬといふ
 意はたあらおいと申すはあつと笑ひおがら。さてもく

子信危の。あざとくも小好くたをこれ吸痔と呑さるる事も
 清ざるが是れ又怒りもあり辛うもあつぬ。あつぬ子信
 めもなせ中あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 が是れもあつぬ考へてん事さるる。あつぬあつぬあつぬあつぬ
 細法なせあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 かつとかんまわさうへ喰つげさようのふ。あつぬあつぬあつぬあつぬ
 て喰つてさあ。あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 是れも事さるる。あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 ともいふべ吸痔と吐出して眼さるるあつぬあつぬあつぬあつぬ
 して。あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ

輪でも驚ふうと井内えへ送ておてふ水の流るるやと
 居てはて石きばを杖の目お杖め、是れと杖が天窓乃
 上へふ水とさざさうけりその目へ目へ涙で痛うもあつぬあつぬ
 さつもあるあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 いちふうとも思ひまらぬが、あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 がたのあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 うしてあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 と懲り已と考へて情んで居るあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 何れもあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 ぬもあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ

古の語の清らなりも子らが何とねのろふをねまゝに
おもしろ

下のまへづく

心學道言 卷中 三編 十一
古の語の清らなりも子らが何とねのろふをねまゝに
おもしろ
下のまへづく
心學道言 卷中 三編 十一

心學道言 卷中 三編 十一

